

家族の時間

横山 恵津美

小学五年生の冬はとても寒かった。部屋のガスストーブが赤く燃えている。上に乗せた大鍋の湯は煮えたぎっている。カタカタと音がするのは中に入っている注射器が鍋に当たっているからだ。

夜遅く隣のおばさん呼びに行く。父に注射を打ってもらう為である。おばさんは父のかかっている病院の看護師さんだった。子供だった私には何の注射か分からない。多分痛み止めか鎮静剤だったのだろう。この冬が越えるかどうかという状態だった。

私は父の元気な姿をほとんど知らない。幼稚園の時倒れてしまったのだ。それからダラダラと何とか持ち直したが、小学校入学式の日にととう入院してしまった。

入学式を終えたその足で父を入院させる。母はさぞかし大変だったことだろう。

両親は田舎で小さな食堂を営んでいた。二人で切り盛りしていたのだ。この日から母一人の肩に全てが乗ったのだった。

小学生も三年生ぐらいになると店のお手伝いができるようになった。お客さんにお茶を出して注文を取る。母の作った料理を出す。ちゃんと「おまたせしました」も一人前に言っていた。

父も調子のいい時は退院して家に帰って来ていたが店に出られるまでにはいかなかった。その後何回も入退院を繰り返した。

五年生ぐらいになると簡単な料理を作れるようになっていた。ラーメンのチャーシューを切ったり、麺をゆでたりできた。

一番の重労働はオカモチで出前に行くことだった。ラーメン二つにカツ丼二個は結構重たい。しかもラーメンのスープをこぼさないようにバランスを保つのも難しいのだ。

土日が忙しかったから、友達とも遊べなかった。けれど嫌だと思ったことなどなかった。同級生の家へ出前に行くこともあったけど、恥ずかしいと感じたことはなかった。だってかあさんをちよつとでも助けてあげたいから。かあさんの喜ぶ顔が見たいから。当たり前のことをしてただけである。

いくら忙しくても田舎の食堂などたかが知れている。そこに父の治療費や入院費が重くのしかかってくる。同級生の読んでいる漫画本が羨ましかった。洋服も誰かのお古だった。遠足の時も新しいカバンは買ってもらえなかった。お年玉を貯めた少しばかりの貯金も母

のために引き出した。

辛くはなかった。父と母がいればそれだけでよかったのだ。私の居場所はここにしかない。血の繋がらない両親だったけれど、私の父と母なのである。

育児放棄された私を引き取って育ててくれた二人。五十八歳の父親と、四十七歳の母親である。随分年の離れた親子だった。

物心ついた時から本当の親子ではないことは分かっていた。ときどき周囲から入る生みの母親の噂も気にならなかった。だってこの二人を父親母親と思って育ててきたのだから。本当だとか、本当じゃないとかそんなことどうでもよかった。

結局父はその冬を越せなかった。心の中に霜柱が立つような寒い朝旅立って行った。

父の医療費がかからなくなったとはいえ、これまで積もった借金を返さなければならぬ。まだ小学生の子供を抱えて、母はどれほど心細かったことだろう。

これから中学生や高校生になったらもっとお金がかかる。次第に家の中から金目の物が無くなっていった。田舎にもパラパラと飲食店ができて始めて、売り上げも減っていった。それでも母は洗い替えが必要だろうと制服を二組用意してくれた。新しいカバンも買ってくれた。欲しかった参考書も揃えてくれた。電車通学の交通費も痛い出費だったはずだ。

もちろんこの頃になるとチャーハンもラーメンも一人で作れるようになっていた。やりたくない、なんて思ったことはなかった。むしろ母と一緒にいられることの方が嬉しかったのだ。父が亡くなってから、いっそうその思いが強くなったのだった。

世間は私にいつも言う、「血は水よりも濃い」と。赤ん坊の私をお風呂に入れ、オムツを替え、離乳食を食べさせてくれたのは誰。熱を出した私をおんぶして病院に連れていってくれたのは誰。いつも心の中で反論していた。親のようなことをしてくれたのが親なのではないだろうか。血の繋がって何だろう。繋がってなくても父と母を他人だなんて思ったことは一度もなかった。二人は心で繋がった私の本当の両親なのである。

私が十八歳の時、母は長年の苦勞が祟って旅立ってしまったのだ。たった十一年しか一緒にいられなかった父。成人式を見せられなかった母。二人と、もともとと一緒にはいなかった。